

2002年度（第4回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

上 西 妙 子

2002年度「学生懸賞論文」には、5点の応募がありました。最優秀賞の該当作はありませんでしたが、2点にたいして、今後も「考え続ける姿勢」を持ち続けてほしいと願う選考委員からの激励をこめて、優秀賞が授与されました。以下に全応募作を概括して、「女性学インスティテュート」を場とする考察の数例を見ることにいたしましょう。

受付順位①の「登場人物の分析による『有閑倶楽部』の人気についての考察」（齋藤美晴さん）は、一条ゆかりによるこのマンガの人気を、「女は男についていくもの」という通俗的ジェンダー・ステレオタイプが人物群によって体现されており、そのことが読者を安心させるからだと論じます。論述は読みやすいのですが、それは説得力の弱さとなりました。人物とストーリーのパターン化や単純さは読者の「願望を充足させる」とする主張に、人物例のそれぞれが結びつけられるという論述の運びは、論文を平板なものにしていました。作品・作家の理解を深めるために、一条式「ジェンダー・ステレオタイプ」の「ひねられた」側面も見てほしいと思いました。

②「少女マンガに見る恋愛の形とその時代背景～一条ゆかり作品を対象としての分析～」(横田純子さん)は、優秀作です。一条ゆかり作品の変遷を4段階に分け、各時代とその社会風俗にてらして概観する論考で、論述は整理されており明快でした。ただ、作品と時代背景の符号が指摘されるにしても、たんなる時代の鏡としての側面にとどまらない一条ゆかりという作者の個性や魅力を、十分に引き出すにはいたっていないと思えました。また、「少女マンガは少女の夢と願望をかなえる」とするごく概括的なマンガ理解を、論者自身がどう考えているのか、反論も聞かせてほしいと思いました。

③「褒める、叱ると性役割—園児の性別による教師の言動の差異—」（徳田陽子さん）はまさに、性差に応じて園児を「褒める、叱る」教師が見せる、生み出されつつある「ジェンダー・バイアス」の場での観察記録として期待を持たせるものなのですが、それならば不可欠の、園児の人数、性別に加えて、教師の人数、性別、年齢の明示も欠けているという、調査・論述の形式の不備が指摘されました。このことは、多いとはいえない観察結果資料と、そこから導

きだされる論点とのつながりの弱さにもつながり、ただ列挙される「やりとり」としての観察記録は、残念にも、論者の〈印象風〉経験報告となっていました。

④「若者の性別による興味対象の相違とその背景の考察—女性雑誌と男性雑誌の比較検討—」（松村有理さん）にたいして指摘されたのも、データ処理の問題です。すなわち、分析対象の雑誌の売り上げ部数や読者年齢層のデータの欠如、特集記事や季節記事への偏り、広告と記事の混同です。そのことは結論を疑わしいものにします。本来「偏っている」特集の偏差を一般化することは、結論を自ら誘導するようなものです。このことは、「比較検討」という、「女性学」にとっても有効な方法への注意の必要性を喚起します。限りなく広がる「背景」から、問題領域をどう切り取るのかという問題なのです。

最後は、⑤優秀作「新祇園祭論」（井裕 薫さん）ですが、論文の構成に弱さが指摘されました。この論文は「祇園祭」という、「生きた文化遺産」の歴史的な背景の記述（文献）と、それに参加することになった、まさしく生身の現代女性へのアンケート調査からなっているのですが、両者はうまく接続していません。「彼女たちが本当に純粋に祭を愛しているのだと分かった」とアンケートの結果はまとめるのですが、そのアンケートの内容が、分析対象となるような意味をもつものでなかったのは問題でしたが、「好きなことをして喜んでいるのに、なぜ、禁制？伝統とは何かと思った」といった論者のワクワクした表現の若さに、選考委員は譲ることになったのでしょうか。

日常生活において、追求したい「テーマ・問題点」に気づくこと、そして資料としての「事実」のいろいろを具体的に「問題あり」と思うこと、一体どちらが先にあるのでしょうか。そのどちらの形においても、「女性学」考察のきっかけはあらゆる場面にあるはずです。じっと、あたりを見守ってください。そして、「いうべきこと、いいたいこと」を聴かせてください。

（女性学インスティテュート学生懸賞論文選考委員長）

〈学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」〉

本学学生（学部生・大学院生）及び前年度の本学卒業生・修了生が執筆した、女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文が賞の対象となる。最優秀賞論文（1編）には5万円の賞金及び賞状、優秀賞論文（2編）には各2万円の賞金及び賞状が授与され、最優秀賞論文については当インスティテュート発行の『女性学評論』（年1回：3月発行）に全文が掲載される。

2003年度（第5回）論文募集の締切は2003年7月24日。選考結果の発表及び表彰は2003年10月中旬の予定である。詳細は当インスティテュートまで。